

経済発展論 (下)

——A・ガーシェンクロンとA・マーシャル

そして日本の経済発展への適用とその限界——

小野 進

目次

はじめに

I A・ガーシェンクロンの経済発展論

(1) 後発国工業化の三側面——銀行・国家・イデオロギー——

(2) 後発国工業化の命題——ヨーロッパ工業史の若干の理論的総括——

II 産業発展に関するA・マーシャルの学説

(1) A・マーシャル『産業と貿易』の性格

(2) 近代資本主義と産業上の主導権が何故他国に先駆けてイギリスに形成されたのか (以上第35巻・第5号)

(3) 産業上におけるフランスの主導権——生産における個性(individuality)と精密さ—— (以下本号)

(4) 産業上におけるドイツの主導権——科学の工業への応用——

(5) 産業上におけるアメリカ合衆国の主導権——多様な標準化——

III アンソロジー風結語——明治以来の日本の経済発展の複合的諸要因の目録をも含めて——

(3) 産業上におけるフランスの主導権——生産における個性(individuality)と精密さ——

フランスの経済発展の様相は、英国のそれとは著しく異なっていた。フランス工業は西ヨーロッパ諸国の工業の特徴以上に西ヨーロッパの特徴を代表している。ラテン民族の中で、イタリアが、日の出の勢いの一時期があった。イタリアは、何世紀もつづいた内憂外患 (internal conflict and oppression by external force) によりその勢力は衰退したけれど、その「天才のひらめき」 (flashes of

genius) によって、イタリーは再度世界の主要な指導国になるであろうと予想された。スペインは、一時、フランスと、イタリーからの指導権の奪取をめぐる張り合った。スペインの工業上の特色は、一般的にはサラセン人の系統によっており、スペインの宗教裁判所 (the Inquisition) は、独創力ある個人を徹底的にパージしたから、スペインのその後の経済史には興味を惹くものはほとんどない。ポルトガルは実地探検の天才であったけれど、その才能は速くも消滅してしまった。ベルギーには、経済史上特色のある都市が多く存在し、ベルギーと同じ面積を持つ国々で、第一次世界大戦前、農業、鉱山、製造品で競合できる国はなかった。

フランスは、東隣りのドイツやスイスから多くのものを学んだように、ベルギーのような国々と密接に連絡して多くの事柄を学んだ。フランスは、大量生産方法を好まない偉大な工業国家のもっとも重要な実例を提供している。フランス国民の長所は、大量生産方式を採用せずに、精巧繊細な製品をつくることにある。このことが、マーシャルによれば、「ドイツとアメリカ合衆国の主導権を調べる前にフランスの主導権を若干研究する理由である」¹⁾。フランスの地理的、人種的、政治的な諸要素は、フランス工業に特殊な影響を与えた²⁾。フランスには、非常に早くからすぐれた道路が存在しており、イングランドが一つの運河も持っていない時に、フランスはその素晴らしい土木工学を証明する運河網をつくりだした。しかし、18世紀には、イングランドは、ビジネスの必要から、道路と運河では、フランスを追い越した。ところが、フランスは、再び道路と運河の修築に着手して、イングランドより前進した。しかしながら、フランスの道路と鉄道は、パリと北部の石炭地方との間に限られた。「フランスの産業立地の地理的分布は現在まで相対的にほとんど変化なく、その一般的性格をとどめている」³⁾。鉄道はその後フランス全土に普及する。「パリがフランスを支配した」⁴⁾。何故なら、パリを頂点にして鉄道が敷設され、パリを除いて、工業都市間の交通はほとんど不可能であった。もし、フランスが、イングランドのように強力な中産階級と裕福な労働者階級が存在していたら、集中的大量生産の成長を妨害した地理的、人種的要因の壁は除去されたかもしれない。

1661年、ルイ14世が即位した時、フランスは繁栄し富裕になった。⁵⁾ルイ14世は、すでに言及したように、ナントの勅令を廃絶することにより、フランスの競争相手に、多くの才能ある職工を提供した。このように、有能なフランス王はフランスを部分的に疲弊させた。18世紀に入ると、フランス王室の奢侈および特権階級の力の濫用は多くの人民を圧迫した。浪費経済では、税は否応なしに切り詰めた生活を強いられた労働者階級によって支払れた。金持階級の贅沢と貧困階級の貧困はフランスをして、金持にとって十分な選択幅のない、普通の人々には十分安くない、実質的な単一商品のための市場にした。フランスは、高級で趣味のいい商品を提供していた市場は、豊さにおいても、品質においても他の市場を一層凌駕する。フランスの優秀な職人は、個性的な趣味と思想、型、配列、色彩を必要とする仕事に特化するようになる。これに対して、英国の職人は、体力、決断力、判断力、持久力、服従、そして豊富な資本を必要とする仕事をむしろ専門化した。フランスは、個人的な関心によって、個人的な選択に合うようにつくられる繊細な織物や金属製品を生産した。イングランドは、活動的で富裕な中産階級の人々の必要な機械器具や頑丈な日用品 (comforts) を多く生産し、このことが、中産階級の人々を一層富裕にした。富裕で審美的な購買者が、職人、小売商人、卸売商人の繊細な感覚と最良の個性的創造力 (the best power of individual initiative) を引き出すのである。⁶⁾需要が供給に影響を及ぼすのである。フランスにおける強力な中産階級の不在と労働者階級の貧困がビジネスの成長を阻害したことはすでに述べた。しかし、これは、「事態の一側面にすぎない」。⁷⁾フランスをして信用を増大させた他の側面は、イタリーから多く学んだフランス国民は、イタリーを除いた如何なる国々より、芸術のあらゆる形態を愛好した。フランス国民は芸術家に最高の敬意を払ったし、「芸術の母 (the mother of the arts)」である建築を称揚し、繊細な趣味が一般的に必要とされる工業を通じて、芸術的思想が日用品に浸透した。

フランス革命を誘発していった「悪い行状」 (evil courses) によって、国民が圧迫されればされるほど、装飾品 (decorative work) の多くの部門でのフランス国民の成功は輝かしいものとなった。19世紀のみならず18世紀においても、

ロンドンでは、着手が自由に着こなせ、丈夫で耐久性と優雅さとが結合した男子の服装をデザインすることではパリを越えていたけれど、婦人服に関しては、フランス製がリードした。外国市場に乗り出して行く前に、偉大なペテイの法則を実行し、国内需要に明確に応じるようにし、国内市場のために熟練労働者を組織し分業の利益を獲得すること、これがフランス産業がおこなったことである。フランス革命は富の不公平な分配に終焉をもたらしたけれど、その後も、このような高度な専門化によってつくられた精巧な生産物が多く残った。

1793～1815年の困難な時期に、最も勇敢で、最も丈夫で、最も有能なフランスの青年を多く喪失した。生き残った人々の新しいエネルギーは主に平和産業に向けられた。イギリスの機械を一般的に採用するために必要な資本が依然として欠如していたから、これらの産業は主に従来の方でおこなわれた。また、フランス国民も、良かれ悪しかれ、やはり、イングランド方式でやる仕事に向うことを好まなかった。革命以前、政府とメタイヤー (Metiers) 即ち親方組合の制限的規制が企業精神を阻止し、地方的にのみ適用されていた遺産相続均分法 (the law of equal inheritance) の全フランスへの適用は、製造業者に高額な工場設備への投資を躊躇させた。何故なら、製造業者の死亡とともに遺産相続均分法により、確実に工場設備は解体されたからである。この均分法は、ちっぽけな土地にへばりつく職人達を生みだした。職人達は、自分の都合のいい時に、安い賃金で、自分自身の家の近くで働くことを欲し、余ほどの高い賃金以外は、その土地を離れなかった。このことが、フランス人の個性を一層強化した。

「連帯」(solidarity) は、フランス人氣質の特色であり、フランス理想主義の統合的要素の一つであり、通時的な感覚であった。「連帯」の精神は、フランス国民の愛国心に強い情熱を与える。それは、困難な時には、援助を求めて政府に寄り掛かるフランス人の性向によって促進される。イギリス人にとっては迷惑であると思われる規制や権力の介入を承認する気質がフランス人にはある。それが極端になると、「独立 (independence) と自力更生 (self-reliance) と敵対するようになる⁹⁾」。しかし、田舎や小さな町におけるフランスの家族には大きな経済的連帯があり、これは、自助の精神の編成ときまりきった仕事を着実に

断固としてやりぬく一定の冷静さを育成する。

18世紀の後半から19世紀の前半にかけて、フランスの産業は、資本の稀少性、実業家のあいだの若干の創造力の欠如、労働者階級の貧弱な食事により抑止されていた。フランスにイギリスの大量生産方式が導入された時でさえ、フランスの最良の労働者を引き付けることができなかつたのはこのためである。木綿工業はフランス人のエネルギーを信用していなかつた。フランスの気候が生糸の生産と絹の製造には有利であつた。最も重要な事は、フランス人は、イギリス人が理解しなかつたデザインにおける趣味、新奇さ、多様さの重要性を理解していた。フランスでは、デザイナーのための学校があり、新しいデザインに著作権を与え、一織物会社には幾人かのデザイナーが働いていた。イングランドでは、幾つもの会社が一人のデザイナーを雇用している。デリケートで込み入つた仕事は、機械力が使用されないから、誇り高き交際嫌いな職人が小さな仕事部屋で、デザインを考察したり改良したりしていい仕事をしている。デザインの仕事における組織化されたチーム・ワークは、科学の技術への適用における組織化されたチーム・ワークの先駆をなした。ドイツやその他の国におけるキヤロコの染色の改良技術は、1833年のフランスのそれが先行していた。

フランスは、「平和時と戦時に老大な軍事支出をおこなつたのにもかかわらず¹⁰⁾」、19世紀後半、富の増加は急速であつた。何故なら、フランス人は強制されるのを嫌がるけれど、勤勉であり、都会ではとくに余暇を好むけれど、費用のかからない仕方ですそれを好む。フランス人の所得は一般的にイギリス人のそれより小さい。しかし、フランスの婦人は節約家 (economical manager) で、廉価な食料を巧みに利用する。したがって、一般的に、支出は所得以下に維持される点では、フランスは資本主義国の中で第一級に属する。しかしながら、フランスは、「国内あるいは外国において、富の非常に大きな部分を新産業や新商業に投下しなかつたように見受けられるのは¹¹⁾」、まったく健康的な兆候ではなかつたけれど、注目に値する。フランス人はとくに工学の才能によって大きな事業 (large enterprises) に適している。フランスの寺院、要塞、道路、運河は、高い創造的才能のあることを証明している。また、スエズ運河やその他の土木

工業事業の成功は、その指導者の構想の大きさを示している。自転車、自動車、潜水艇そして航空機のような製造業においても、フランス人は優秀な才能を示した。これら新しいデリケートな産業は大量生産の段階に達するにつれて、「規律のある最も着実な才能が一層重要になる」¹²⁾。フランスが長い間主導権を確立していた産業には上述したようなフランス人の才能が示されていた。フランス人のデザイナーと優秀な職員の個性、依然として、生産物の無限の多様性を生み出す形状と色彩の制御（mastery）においてそのことを十分示している。新しいパリ製品は大金持の顧客に高い価格で販売し、つぎに、地方の職人によって細工されたその模倣品が、中程度の金持にかなり高い価格で販売される。最後の段階は、一般的な使用のためにニュー・ファッションの採用である。組織にすぐれた才能を持った商業国の人々は、フランスから輸入したモデルの着想と基調を把握し、この着想を可能なかぎり、機械的言語に翻訳し、中産階級や労働者階級のために相当な程度の出来映え（passable）のイミテーションを生産する。このような競争に対応するために、フランスは、大量生産方式が十分適当でない産業においてさえ、大量生産方式を適用せざるを得ない。しかしながら、パリは、以前の商品に飽きた人々に高い価格で売れる一つまたはそれ以上の新しいモデルをつくる。このように、フランスの創造的な才能は、富のたえざる流れの源泉であった。フランスは、その地位を維持するために、不断に新鮮な発明的考え方の供給を必要とする。パリの卓越せる力は、危険な源泉になるかもしれない。フランス農民の間に普及している驚くべき決断力、家族愛、節儉は、危機の時に、フランスに強さと安定性を与えるけれど、フランス農村ではパリの知的芸術的力はほとんどみられなかった。

結論的にいえば、フランス工業は、補助金や競争的輸入品に対する保護関税による政府の援助を最大限に受けたけれど、それは最も繁栄した産業ではなかった。これらの産業の中で、主なものは、造船業、鉄鋼業そして普通の織物製造業であった。これらの産業の中でフランス人の気質にとくに適合したそれはほとんどなかった。これらの産業は遅々としてしか進歩しなかったから、政府の古い産業への援助はそれら産業の企業活動を阻止する傾向があるという観念

に若干の支持を与えた。政府はデリカシーと精巧さを特徴とする生産物をつくっている産業にはとくに援助を与えず、他の諸国の類似品より高い価格で販売するようにさせた。

- 1) A. Marshall, *Industry and Trade*, p. 108.
- 2) 中世には政治的統一がなく、フランスの工業は統一を欠いていた。フランス工業の主要な中心のほとんどすべては、セース、ローアル、ガロンヌの諸河とライン河の沿岸あるいは港湾、国境近くに群生し、北と南と東の工業は相互に密接な連絡はなかった。
- 3) A. Marshall, *op. cit.*, p. 109.
- 4) *Ibid.*, p. 109.
- 5) *Ibid.*, p. 110.
- 6) *Ibid.*, p. 111.
- 7) *Ibid.*, p. 111.
- 8) *Ibid.*, p. 114.
- 9) *Ibid.*, p. 114.
- 10) *Ibid.*, p. 117.
- 11) *Ibid.*, p. 117.
- 12) *Ibid.*, p. 118.
- 13) *Ibid.*, p. 119.

（４） 産業上におけるドイツの主導権——科学の工業への応用——

ドイツは、中世の大部分とその後のある期間、栄光に満ちていた。そして何世紀間もの国内の不統一や外国の侵略は、ドイツを目立たないところに押し遣った。19世紀後半には、ドイツは急速にかつ確実に政治上経済上第一級の開拓者の位置に前進した。この意味で、ドイツは新興国であり、青年期の新しい若干の特徴をアメリカと共有していた。しかしながら、現在の強さは、遠い過去からの偉大な根源的な資質の継承であることは十分理解しておかなければならない。隔世遺伝的影響 (atavistic influences) は、個人について同様に、民族全体についても注目しなければならないのである。歴史の教えるところによれば、ドイツ人はドイツ人に親近さを示す者に愛情を示し、その同情心はかなり狭く、「特殊主義」(particularism) に傾き勝ちである。即ち、ドイツ人は、「自

己の属する特定の社会・経済・政治的グループの個別の利害に対する不適当な主張、見知らぬ人々を犠牲にして闘争する¹⁾傾向がある。カルテルのようなもの、中世諸市のハンザ同盟やその他の同盟を偲ばせる何かがある。今日の(20世紀初期の)ドイツのある地域は、イタリーを除いた他の如何なる国々より、中世時代に商業と産業に指導権を有した都市を含んでいた。これらの都市は非公式の同盟をつくったりして、たえずその境界線は移動していた。1850年頃までは、ドイツの国富は相対的にイングランドのみならずフランスより小さく、ドイツはベルギーやスイスよりも遅れていた²⁾。しかし、人々は事情を深く観察するならば、真のドイツ精神 (the true German spirit) が間断なき紛争によって単に覆い隠されているに過ぎないことがわかるであろう。真のドイツ精神は消滅しなかった。ドイツ人は政治上では失敗したけれど、ドイツ人の思想は、「空中の帝国」(an empire in the air) 即ち、哲学、文学そして音楽の「帝国」を建設した。「空気中のこの帝国」は、プロシヤのものでなくて、ドイツのものであった。この観念上の帝国は、物質上の帝国の基礎であった³⁾。

19世紀前半、大学はドイツ各地から集まる人々の集会所であった。学者と学生が、各大学を移動することによって、哲学、科学そして文学や音楽がドイツ統一運動を鼓吹した。この知的統一運動は、経済問題に多くの注意が払われる前に、長足の進歩をとげた。しかし、ドイツの商業部門の不便さが逐次明確になってきた、それで、物質的な事柄にのみ関心を持った人々は、この不便さによって生じる「いらいら」を利用して、商業的統一を押しすすめた。一部分は、より大きな目的への手段としてであった⁴⁾。この運動はドイツ関税同盟 (Fiscal-league) の形態をとった。1852年、関税同盟は単一の関税地域として全ドイツに拡大し、域内において商品は関税なしに移動し、国境において徴収された関税は共同基金として使用され、最終的に国内商業への障害を排除した。この障害はF・リストの言葉でいえば、「国内交通を不具にし、そして、人体のあらゆる四肢はきついヒモで縛り、それ故、血液は身体の中を循環することができないのと同じ効果を持つ⁵⁾」。関税同盟の利益は、開明自由貿易論者 Nebenius と開明保護関税論者 List のいずれの観点からみても、何らかの相当な欠陥によっ

でも減殺されないということである。

ライン河——重要地点の水深は深くなっている——は、5000トン級の貨物船の航行が可能であり、これらの貨物船は、石炭やその他の重要物資を低廉な運賃でほとんどスイス国境まで運ぶことができた。ライン河ほどでないにしても、ライン河以外の河川も改修された。ドイツの主要な河川の流域と連絡する運河組織は当時すでに改修されつつあり、ドイツの北部地方における重量のある貨物品の運賃の一般的な低廉化のため、将来一層の運賃低下が期待された。ドイツ最初の鉄道は主に水路交通が最高に供給されたこの地域に建設された。1850年でも、ウエストファリアとラインランド地方とその近辺は、人口が稠密で、商業と工業が繁栄した地域を形成し、ドイツ諸州の鉄道系統は、これらの地域に従属していた。鉄道は、低部ラインランドやウエストファリアを、ヨーロッパ大陸において、最強力な経済単位にした。これらの地方は、南部においては、ルクセンブルグやアルサスの鉄鋼及びライン河上流域地方の工業地域と密接な鉄道網で結びつけられていた。東部においては、類似の鉄鋼地域がサクソニを通じてシリアにのびている。これらの二地域は、ヨーロッパ大陸の鉄及び鋼の産出物の約半を生産していた。ドイツは、南部ババリアを除いて、ほとんど山脈はなく、ヨーロッパの中央部の位置の利益を享受していた。ドイツの地味はフランスほど豊饒でなく、ドイツの気候はフランスほど温和ではない。ドイツの地味は、英国の第四番目の最良の地域のそれより良いとはいえない⁶⁾。ドイツの暑い夏は、英国より小麦、甜菜やその他の作物に適している。ドイツは、全体として、フランスよりも小さい英国よりも、同一の労働量と機械設備でもって一エーカー当りの食料をより多く供給することができる。当時のドイツの人口は英国やフランスのそれより稠密であった。ドイツはヨーロッパで発見された石炭の半分を持っており、酸化カリウム (K_2O) の埋蔵量では比肩する国はない。鉄鋼の供給は、第一次大戦まで、アルサスやフランスからきていた。ドイツを囲む最富裕国又は最富裕に近い地方は、鉄道連絡が便利であるということは注目に値する事実であり、ドイツ国内とこれらの地域との交通は、「直通運転」(through traffic) によっておこなわれた。このことは商業により大きな

重要性を与える。⁷⁾

英国の輸出と輸入は、一般的に、鉄道から船舶に、船舶から鉄道へ、若干の費用で、しばしば若干の余分の危険でもっておこなわれなければならなかった。しかし、ドイツの輸入貿易においては、貨物は直接生産者から消費者の倉庫に輸送される。ドイツは、アメリカ合衆国と英国を除いて、国境と国境が接しない国々への輸出額は、全輸出額の $\frac{3}{100}$ に達しなかった。「ヨーロッパの市場は、総計において、現在、世界の他の $\frac{1}{4}$ の地域の市場より大きい」⁸⁾。ドイツはその中心であり、運賃の節約は現実にはドイツの販路を拡大した。各邦の長い間の分立のため、ドイツは、大量生産のための機会がほとんどなかったけれど、突然、例外的に大量生産の利益を獲得した。ドイツは、その国情の線に沿って大量生産の利益を発展させた。このことは、一方で、プロシヤやドイツの自余の諸邦においてより小さな程度において良かれ悪しかれ、フレドリック二世やビスマルク等の鉄血主義者 (men of iron) が展開した厳格な規律 (strict discipline) を表示するとともに、他方で、国民精神 (national spirit) の高揚と関連した教育への熱望を示している。これらの二つの動機は、ドイツの「偉大な地理的利益」 (great geographical advantages) に作用し、必然的でないにしても、ドイツを科学を大量生産に適用する指導国にさせた。地理上及び物質上の視点からみれば、フランスとドイツは、若干の側面において、相互に類似しているけれど、人間の視点からみれば、差異性の方が同一性より著しい。200年間、フランスは強力な国民感情によって統一され、ドイツは相互に闘争を繰り返した。にもかかわらず、個人主義 (individualism) はドイツの性格よりむしろフランスの性格である。⁹⁾ ドイツの最良の手細工 (the best handiwork) は、芸術的な感覚が必要とされる点において、フランスのそれほど个性的でないかあるいはすぐれている訳ではないし、仕上げの正確さと精妙さを要する生産物においてはイングランドの最高水準に常に達しなかった。一般的に言って、ドイツの小工場と家内工業の生産物は、大工場の生産物より以下に位置づけられ、長時間労働と低賃金を反映する低価格によって販売されていた。

ドイツは科学研究において指導的位置を維持しており、科学の実際問題への

組織的適用において競争相手は存在しなかった。1828年 Liebig はギーゼン大学において化学研究室 (chemical laboratory) を設置した。生産における化学技術のその後の急速な進歩の大部分は、彼の学生達とドイツ等において彼等によって教えられた人々に負っている。化学の真の母国であるフランスは、フランス自身の路線に沿った仕事を続けた。アメリカの科学研究は初期にはドイツの影響下にあった。英国も次第にドイツに従った。ドイツの教育の主要な強さはその秩序と制度に存する。規律 (discipline) は自発性 (spontaneity) の敵である。¹⁰⁾ 自発性は創造的仕事、とくに思想に画期をもたらすような創造的仕事の主要な要素である。ドイツの生徒の規律ある学校生活は工場や経理課における服従的仕事 (subordinate work) の良き準備である。しかし、これは、自助 (self-reliance) と忍耐力 (the ability to forbear), 速い直観力 (quick intuitive sympathy) の教育において、部分的に成功したにすぎない。子供が子供から学ぶ教育は政治的才能 (political faculty) の主要な源泉であり、このことは、若干の欠陥にもかかわらず、同情心と愛情の絆において、大英帝国を結束させた。歴史は、ドイツ人が幾分これに欠けていることを示しているようにみえる。¹¹⁾ ドイツの学校は英国のそれより厳しい規律を持っていた。にもかかわらず、ドイツの大学においては、教授と学生は偉大な自由 (great freedom) を享受していた。学生と同様に、教授のたえざる大学から大学への移動は国民的意見の形成に影響を及ぼした。ドイツの大学教授は、講義のテーマやその主題をとりあつかう方法を選択する自由が許されているにもかかわらず、ドイツの大学では相当な程度において秩序と効率が結びつけている。このように、世界の各国は、ドイツの教育方法から学ぶことが多い。しかし、ドイツの学校生活の規律は大学で与えられている無制限の自発性にとって良き準備であるかどうか疑しい。¹²⁾ この問題は、イギリス人も自信を持って語れない問題であるが、とマーシャルはいつている。この問題とは、ドイツの教授のあげた独創的な業績にもかかわらず、それはしばしば幾分洞察力 (penetrating power) を欠く嫌いがあることである。しかし、ドイツの大学における平均的學生は、英国の大学の平均的學生 (運動競技に過度に熱中するのにもかかわらず) のようにうまく教えられたり、あるいは

真面目に研究したりしているのかどうか疑しい。しかし、ドイツの学生の大部分（約65,000人）は、学校卒業後、科学研究に従事していた。そして、約五千人の訓練された科学者は、特別な技術により生計を立ようとしていた。

軍隊教育は非常に弱い性格の人々に何らかの堅実さを与え、貧民の増大を妨げることに役立つことができた。しかしながら、それは多分繊細で感受性に富んだ人々にとって何らかの障害になり、文学や芸術や科学における表出にとって必要な最高の才能のみならず肉体的熟練のより精妙な訓練の発展を阻止するであろう。これらの留保条件は重要である。ドイツの知的活動の総量は、他の如何なる国よりも大きく、大抵の大企業的首脳や高級官吏が大学で獲得した広範囲な学識は、ドイツに科学の産業へ幅広く適用することを可能にし、産業上における特別な種類の主導権に対する主張を確立した。

教育における大量生産の経済 (the economies of massive production) を利用して、ドイツは、下層の中産階級や職工さえも手の届く授業料で、高等教育を供給することができた。教育の大規模システムの偉大な利益は、若干の欠陥を伴う、その欠陥は、「科学的知識のあるプロレタリアート」の成長として時々描かれている。¹³⁾単に書いたり、簡単に計算をすることができる会社員は適当な地位をみつけ、日常的なルーティンな仕事の改革者は彼の地位を少々昇進させる。各自が適切な地位を得ている時、経済的観点からみれば、各自は卓越せる任務を果しているのみならず、社会的観点からすれば自国の強さの源泉である。

ドイツ——スカンジナビアやスイスでも同じことがいえるが——においては、教育は、日常生活における市民の行動に真面目さと強さを与え、国民道徳 (civic virtue) を発展さす。教育は、また、今日のドイツ人にドイツ人が耐乏経済の世代から受け継いだ低い生活水準と高遠な思想の習慣を固執させる傾向を与えた。¹⁴⁾ドイツ人の栄養はかつてより改善されているけれど、ドイツ人の食事はやはりフランス料理よりも常によくはない。60年前、多分40年前も、平均的なドイツ人は、イギリス人の半しか仕事をしなかった。しかしながら、イギリス人は繁栄によりやや甘やかされている間に、ドイツの産業労働者は以前より一生懸命働くようになった。ドイツの労働者の一時間当りの仕事は、イギリス

の労働者とほとんどかわらなくなり、ドイツの労働者の労働時間はイギリス人より長くなった。

現代工業の初期の段階では、科学的訓練は相対的に小さな重要性しかもたなかった。それ故、実際的な能力や組織的能力に弱いことを認識しているドイツ人は、先進国を凌駕しようとして、最初は、生徒の役割に甘んじた。ドイツは、まず、イギリスの製造技術を直接模倣することによって始めた。つぎに、イギリスの企業に雇用されて、低賃金のかわりに勤勉な用役を提供し、ビジネスの内部の working における知識を習得した。¹⁵⁾このようにして得られた実際的な知識と才能は、大規模なビジネスの効率性を発輝するための基礎として役立てられた。これは、工業と商業のすべての領域に普及した。学校、大学そして技術研究所の組織的訓練は、工業と商業に利用された。ずっとドイツは他国でつくられた如何なる重要な発見の実際的な意義を速やかに把握しそれを速やかに利用してきた。進歩が、将来の目的への手段の機械的適用——そこにおいては、彫琢された精神的訓練より、当意即妙な機知 (ready wit) と健全な判断がより重要である——に依存しているとすれば、ドイツの工業上の指導権の拡大への希望は、現在より小さかったであろう。人間が獲得しつつある自然に対する支配力の増大の大きな部分は、化学、電気、生物の諸科学の助けに負っているであろう。いまだにほとんど開拓されない広範囲な領域が存在する。将来収益を増加させるかもしれないこれらの領域においては、天賦の機智が重要になるけれど、それは、十分な訓練と高度な研究室で装備されている条件の上においてのみである。丁度、海戦において、天賦の機智と勇気はかってにおいても今日においても勝利のために必要であるが、近代的装備による助けがなければ、それはほとんど役に立たない。農業の進歩は、化学やその他の科学の適用に大きく支配されていることはよく知られている。新しい織物や染料、ガラスそして鉄鋼などは、圧力、爆発力、熱やその他の物理的諸力の適用によって生産されたものである。¹⁶⁾ドイツはこの点においては顕著な役割を果たした。二・三の諸国は、これらの種類の科学上の概念ではドイツと同じ水準に達しているけれど、微細な組織的仕事 (the organized work of detail) において、いままで、ドイツに

比較できる国はなかったけれど、この微細な組織的仕事による、画期的な思想が、産業に画期をもたらす方法で実現された国はドイツ以外になかった。ドイツは、科学を実際的な仕事に応用のための大きな展望を与える化学工業（ガラス工業を含む）においてリードしていることは疑うことはできないし、他国より、科学の進歩を自己目的とするもの、各種の技術的目的を追求するものの両方において、より大きな数多い研究所を持っていた。

ドイツ産業は、伝統的な組織の束縛からの自由において、イギリス産業より有利であった。ドイツは、偉大な任務のために、大量の資本と労働力を集中することができ、他国の経験、他国の最良の方法、機械や組織を刺激改良することにより利益を得ることができた。¹⁷⁾ドイツ人は、英仏の産業人がすでに確立したところの市場において地歩を獲得しようとする時、利益が小さい場合でも、どんな小さな注文でもそれに応じるようにし、とくに製造業において地方のニーズに綿密に適応させることにすぐれており、気候、趣味、習慣そして迷信における差異をすばやく注意した。ドイツ人は長期の掛売りで相対的に小さいリスクで販売できるビジネス事情を良く知っており、東欧、アジアそして南米の言語をマスターすることに労をとった。

保護関税により、経済的にドイツの勢力圏内にあるヨーロッパの若干の諸国は、より単純な形態の大量生産のドイツ方式を採用しつつあり、したがって、ドイツは、かつてのイギリスやフランスがなしたように、半発展国 (half-developed counties) が独力で生産できないような精密なる商品、しかも、世界の各地の金持の消費者が価格に関係なしに買いたいと欲している商品を生産する方向に、ドイツの輸出産業を転換せざるを得なかった。ドイツは、ほとんどスラブ民族とラテン民族から、鉄工業と建設業のための強健な肉体労働者の供給を受けた。¹⁸⁾彼等は喜んでしばしば低賃金で勤勉に働き、未熟練の肉体労働だけでなく半自動的な機械の運転のために役立った。これは、英国の繊維産業の新しい地域が、かつて古い地域に対して持っていた利益のように、ドイツとアメリカ合衆国は、英国より有利さを持っていることを意味する。何故なら、新しい地域においては、誰もが、新しい方法により新しい仕事をするを欲してい

る反面、古いギルドの精神が、長い訓練によって得られた知識と熟練の価値を低める傾向にある新しい方法の導入に対して反対を提供した。

大量生産の経済を提供する産業は、保護関税により多くの利益を得ることができるのは当然である。もし、保護関税が、外国に対する大量販売の機会を開きながら、産業に攪乱されない国内市場を保障するように整備されるならば、国内外の販売は中立市場における競争相手より安く販売するように当該産業を助け、大量生産の経済が一層強まるのである。¹⁹⁾ ドイツ人とアメリカ人は、このような考え方に支配されることが多かった。ドイツ人とアメリカ人は、国際貿易に関する国家政策 (national policies) は、大量生産が確立した時のそれと大量生産が確立する以前のそれとは異なる基礎に依存しているという結論を生み出した。²⁰⁾ しかしながら、このような示唆は不十分であると考えられる理由が存在する。第一に、大量生産の経済には、多くの異なった種類のそれがあるという事実を説明しない、ある大量生産の利益は、コスモポリタンの属性を持ち、あるそれは、国家的であり、あるものは、地方的であり、あるものは、個別企業に属する。第二の新しい視点は、保護関税により単一産業が多くの利益を引き出すことは、他の産業への損失と障害を意味するという古い議論に力を与える。そして、たとえ保護関税が特殊な有利さのために大量生産の産業が適切であると考えられるにしても、究極的な結果は、大量生産産業にほとんど役立たないかもしれないし、また、一般に国家に損害を与えるであろう。「この種の問題は、だんだん明確になってきたことだが、経済学者の最高の問題と密接に²¹⁾ 関連していることである」。

1) A. Marshall, *Industry and Trade*, p. 122.

2) *Ibid.*, p. 123.

3) *Ibid.*, p. 123.

4) *Ibid.*, p. 123.

5) *Ibid.*, p. 124.

6) *Ibid.*, p. 126.

7) *Ibid.*, p. 127.

8) *Ibid.*, p. 127.

- 9) *Ibid.*, p. 128.
- 10) *Ibid.*, p. 129.
- 11) *Ibid.*, p. 129.
- 12) *Ibid.*, p. 130.
- 13) *Ibid.*, p. 131.
- 14) *Ibid.*, p. 131.
- 15) *Ibid.*, p. 132.
- 16) *Ibid.*, p. 133.
- 17) *Ibid.*, p. 135.
- 18) *Ibid.*, p. 137. アメリカ合衆国も、スラブ民族とラテン民族から肉体労働者の供給を受けた。
- 19) *Ibid.*, p. 138.
- 20) *Ibid.*, p. 138.
- 21) *Ibid.*, p. 139.

（5）産業上におけるアメリカ合衆国の主導権——多様な標準化——

アメリカ合衆国における製造業の方法は、各種の機械設備や消費のための生産物が標準化（standardization）されていることである。アメリカ的方法是、最終生産物を単純な部分に分解し、十分な数の半自動機械に分解した部分の装置を供給することである。標準化は、使用される材料の相違と、生産物が必要とされる目的に応じて、いくつもの異なった種類をもち、個別企業の構造、産業のマーケティングと一般的組織に¹⁾応じて変化する。マーシャルがここでの関心は、アメリカに主導権をもたらした原因とその一般的特徴である。その原因は、最強国中の強国になっているのに青年の精神を維持していること、人種的差異にかかわらず、龐大な人口の生活様式の画一性、一方では、特殊な熟練に欠けているけれど、半自動的機械を動かすことができる移民労働の大量の供給、他方で、計画と管理において機敏な決断力のあるアメリカ的迅速性、鉄道による長距離輸送の運賃の低廉化により、遠隔地にある巨大企業は、近くの小企業との競争において有利である、少数の人々に大量の資本が蓄積されていること、である。

「新しい国」（“new country”）とは、通常、西欧の先進国民の効率的な支配の下にあって新しくなった国と考えられている。それ故、この新しい国では、原住民（aboriginal population）は依然として生活しているけれど、その土地の運命についてもはや何らの影響力も行使していない。新しい住民は、彼等の新しいやり方とその土地の資源で、その土地を発展させた。「旧い国」とみなされてきた国が、再び、突然「新しい国」になるかもしれない。何故なら、その国の多くの人々は、近代的産業方法の魅力に目覚め、産業技術をこれまでほとんど眠っていた豊富な天然資源に精力的に適用する。「日本は、この意味でここ30年間ほどで新興国になった²⁾」。より多くの天然資源をもつインド、中国、シベリヤそしてブラジルは、今世紀のうちに新興国になるかもしれない。これらの国々は、アメリカ合衆国から学ぶべき多くの事柄がある。アメリカ合衆国は、英国、フランス、ドイツという三角形に、第四番目の頂点となり、四辺形を形成した。この四大工業国の影響は遠くまで及んだ。北アメリカのような温和でかつ刺激のある気候条件の中で、頑健なヨーロッパ人によって設立された植民地は繁栄した。肉と木材と酪農品は豊富であり、粗雑な家屋が容易に建てられ、穀物が精選された良質の土壌の畑から得られたため、人々やその子供達は良く育ち、頑健であった。マーシャルは、そこでA. スミスのつぎのような言明を引用している。彼等が母国からもたらした最も重要な富は、「農業技術の知識……服従の習慣そして正規の政府についての若干の観念」である。彼等はまた遠大な利益を期待して現在の苦しい仕事に耐える喜びと遠くを見る習慣をもつようになった³⁾。「精神的富」（moral wealth）である資本ストックがヨーロッパからくるまでは、アメリカ合衆国には素晴らしい物質的資源が眠っていた。

移民はアメリカの物質的富を発展させた。移民の生活における新しい希望、自由そして変化は、彼等の生活の中で、高遠な精神と自主性の芽生えを発展させた。これらの要素は抑圧されて顕在化しなかっただけで、大低の人々の中に潜在的に存在している。定住生活（settled life）の安定性と静謐（stability and quiet）さは、人々の性格に良好な影響を与えるとともに悪い影響を与える。人々は、異なった習慣をもった人々との交流により、あたかも従来自然の法則

のように黙諾してきた思想や行動についての多くの習慣を吟味しはじめる。移住民は、母国に残った大多数の者より、機敏でより弾力的な考え方を持っている。これは、異なった環境の中で、移民の心的活動を刺激するという法則によっている。鉄道や電信の時代以前の「新しい国」の人里離れた村々での生活は、母国のそれにおけるよりより酷しい状態に置かれていた。このようにアングロ・サクソンの植民地は急速に時代遅れになっていた。オランダの植民地もそうであり、フランスの植民地であったケベック州のある地域はフランスより時代遅れであった。しかし、ミシシッピー渓谷の開発はイギリス人に衝撃を与え、ある面において、合衆国の19世紀の初頭より若く活動的であった。何故なら、合衆国の人民は、新世界のヨーロッパの他の植民主義者とは異なり、彼等の精神的なエネルギーは、大西洋を渡る偉大な移民行為によって刺激されたばかりでなく、広大な合衆国内部における異常な移住の継続によって刺激された。過去60年間、この傾向は強力であった。この国内の内部移住の主要な原因は、最も豊富な地域に初期の移民が接近することができなかったからである。最も活動的で、冒険心に富む初期の移民の子孫は、大陸の中心地にある経済的に魅力のある土地に移動した。この事実は、政治的観点のみならず経済的観点から重要であった。大西洋岸の土質は、とくに北部は、相対的に貧弱である。偉大なミシシッピーの渓谷の最良の土質は非常に柔かった。「歩くための杖 (walking stick) は、それを把手まで押し込むことができる⁴⁾」。ミシシッピーの大部分の地域では、「植物の食料が多く保蔵されている」から、肥料なしで多くの穀物のストックを生み出すことができる。北部の半分では、土壌と気候が小麦にとくに有利であり、南部では、玉蜀黍が標準的な穀物である。何年間も肥料を不要とする力は、農器具を設備し、家畜で種をまく資力のない人々にとっては非常に魅力的であった。この有利さが、この土地の一般的な肥沃さとが結びついて、「西部」（ミシシッピー渓谷は長い間こう呼ばれた）に、偉大な国民の背骨になるような頑強で独立的な性格をもつ人々を惹きつけた。

「鉞夫の動態」は、農民より一層自然的原因により支配される。両者は、鉄道⁵⁾にとっては重量のある貨物を提供し、一般的に鉄道建設のコースを支配する。

水力は製造業者を惹きつける。しかし、西経約 100 度から 120 度にのびる山岳地帯の不毛性の主要な原因は水不足である。今日知られている最も豊富な石炭産地はアレガニー山脈 (the Alleghanies) の西側の斜面に位置しており、最も豊富な鉄鉱山は シュペリオル湖 (Lake Superior) の近くにある。製鉄業者に必要とされる原料は、ほとんど同じコストで、アレガニー山脈とロッキー山脈の間に位置する大部分の諸州から集めることができた。これらの諸州では、農業とともに鉄鋼生産や一般製造業者の生産が最も豊富である。アレガニー山脈は、現実には、大西洋岸とミシシッピ渓谷の間の往来にとって障害になっているけれど、これが克服されるならば、如何なる競争相手になる国もないほど合衆国は発展するであろう。⁶⁾

「アメリカ人は、不断に拡大する国内需要を持っている、このことが、アメリカ人を拡張に導き、コストを改善し、合理化し、新しいプロセスを採用するように導く。アメリカ人はまた一政府の下に一大陸を持つ……要するに、それは、同じ条件、同じ法律、同じ国旗そして自由市場の下で、あらゆる点において制約されない自由交易を持つ」(Carnegie)。この完全な流動性 (perfect fluidity) は、アメリカ合衆国の各生産部門をすばらしく効率的にした。しかし、これは、同時に、生産者と消費者が広く分離される傾向にあり、この分離が強力のために、生産方法を抑圧する傾向があった。何故なら、それは、購買者の特別な必需品あるいは嗜好に依存しているからである。この生産者と消費者の乖離と消費者の趣味と嗜好を考慮せざるを得ないという方向への強い力は、工業製品のアメリカ人の需要の同質性 (homogeneity) によって促進された。スカンディナヴィア人は、イタリー人、そして土着のアメリカ人とポーランド人とは、感情、生活様式そして職業においてさえ相異しているのにもかかわらず、彼等はほとんど同じ商品の購買者である。気候の差異を斟酌するにしても、彼等は類似した衣類、家具と家財用具等々を購入する。若干の黒人と若干のその他の人達は、古い習慣や方法に固執し、最も効率的で経済的な用具より彼等の慣れている用具を選好する。

アメリカ合衆国の人口の需要は homogeneous であるけれど、この人口は、

一方で、機械を発明するために必要な才能と素質を、他方で、相対的に低賃金で十分な知識をもって機械を作動させるために必要とされる才能と素質を供給した。農民にならなかったイギリス人、スコットランド人及びドイツ人の移民は、一般的に、都市あるいは鉱山で熟練労働者になった。長い訓練時間を要する各種職業の職長の大部分は、これらの移民労働者から供給された。即ち、真正のアメリカ人は、経営上の高い地位に就くかあるいは着実に獲得される手先の技能よりむしろ機械を動かすのに異常な機敏さを必要とする仕事に従事するのかいづれかであった。アメリカの製造業者は、不断に繊細さと精巧を必要としたのかかわらず、高度な手先の熟練さ、とくに、手工業における長い徒弟生活に奉仕した人々に対する需要の増加の程度は緩慢であった。限られた高度な手先の技術をもったヨーロッパ職人をアメリカへ移住をするようにする誘因は以前より小さくなった。あれこれの理由のために、イングランド、スコットランドそしてドイツからのアメリカへの移民は、非常にすくなくなった。アイルランドからの移民も、依然として、相当多かつたけれど、また緩慢になってきた。この理由は、一つは、アイルランドの人口が、その資源にとってもはや大きくなりすぎていないこと、土地制度が、かつて存在したより寛容になったことによる。

イタリアやヨーロッパの中東地域の貧しい人々が、アメリカ合衆国に避難場所を求め始めた。イギリス人やドイツ人を母国にとどめつつある経済進歩の同じ理由が大西洋を渡らず比較的貧しい人々の数を増やした。これらの人々の中には非常に優秀な人々が含まれていた。たとえば、カリフォルニアにおける良好な果物を育成する技術の急速な進歩は、イタリア人の移民の伝統的な技術によってもたらされた。しかし、彼等の多くは、建設、鉄道建設、鉱山、鉄鋼業等々における肉体労働に従事していた。ある鉄鋼業のある特別な部門では、スラブ人がそれまで職長として労働してきたがアイルランドの人達にとってかわられ始めた。また、スラブ人労働者の大多数は、大都市において相対的に軽くて単調な労働に従事していた。イタリア人労働者は確固たる意志と自制心が欠如しているかもしれないが、彼等は、敏捷機敏で、かつ多才で、そして、一般

的に容易に訓練を受けられ、機械の使用にすぐに関心を持ち、半自動機械を使用することを妨げる伝統を持たない。このようにして、アメリカ合衆国は、相対的に低賃金で、大工場ルーティンな仕事をする大量の人々を供給することが可能になった。⁷⁾

旧世界においては、進歩的な産業地域は、労働者達にとって、その生産方法ははじめてであり、最新の過程にすぐ自分達を適応させ、全力を尽して最新の機械を動かす労働者達の移動から多くのもの獲得した。ドイツ以外の国で、より次元の高い機敏な労働者をほとんど無限に供給できる国は米国以外にはなかった。すべての移民は、孤立した行動と個人主義的ねらい (individualistic aims) をいただく傾向がある。⁸⁾ この傾向は、物質的成功の熱心な追求者を育てる。この傾向は、また、機敏さ、飽くことなき努力、賃金の高低によって職業をかえることを促進した。これが合衆国の特徴であった。この点に関しては、アメリカの条件は、一世紀前のイングランドの産業地帯の諸条件と類似していた。

特化された生産の諸部門は、適当な原材料と好ましい気候そして良好な市場への接近が容易である場所に生じる傾向がある。しかし、このような条件を満たした産業の発展は、最近まで緩慢であった。合衆国では、地方産業の成長は常に急速であった。その理由の一つは、合衆国の職人の多くは移民であったからである。勃興する産業の中心に向けてすでに移動した者を誘因する力は、母国から移民を惹きつける力より小さい。したがって、特殊な熟練をもった移民は、自己の技術が高く評価されるであろう場所に容易に移動する。この地方化の原因は、自動機械やその他の高価な機械が、高度な組織的才能 (high organizing faculty) とともに、肉体的熟練よりより重要な要素になるや否や、非常に弱体化した。しかし、良好で安い鉄道網によって与えられる利益は、合衆国の中部と東部の諸州の人口彫密な地域や町に対して、資本家的企業者や労働者に対して不断の誘因として作用した。ほとんどすべての大都市は競争的な鉄道サービスを持っていた。アメリカ合衆国は、他の如何なる国より交通条件が良好であった。この競争的な鉄道サービスは、英語をしゃべらない移民に、自国語を話す職長や仲間の下で仕事を見付けだす良いチャンスを提供する。これらの

利益は、産業の大中心地が常に製造業者に便益をもたらすように、巨大都市に多くの移民を集める傾向があることである。中程度のサイズの都市においては、工場のための敷地や住居は低価格のために、イングランドと同様にアメリカにおいても、工場がこれらの都市に移動したのである。若干の強力な工場は、鉄道と特別な取引をし、田舎に行き、そこで工場自身の都市を建設した。これらのすべての都市は、巨大都市がそうであるように移民の大抵の階級に高度な魅力を与えた。巨大都市の人口増加は、イングランドでは見られたように、郊外の拡張によっている、50万以上の住民の人口増加率は、全人口増加率より小さい、そして、5万と45万の間にある中都市のそれより小さかった。

機敏な考え方を持った人々が指揮する製造業の大量生産の組織は、その作業の大部分は半自動機械によってなされるが、それは、相互に補充しあう才能 (mutually supplementary aptitudes) を持った労働者の大軍を必要とするのみならず、強力で企画力のある所有者の手に大量の可動資本の集中を必要とする⁹⁾。合衆国の物的資源は、鉄道がミシシッピ渓谷 (Mississippi Valley) と大西洋岸との密接な連絡しそして新世界が旧世界の市場に密接に結びつき始めた時から、急速に増加した。合衆国の所有の剰余の支出は、新しい地域における鉄道、道路等々の形成、農家の建築、農業の発展にほとんど吸収されてしまった。農地と農業資源は、合衆国の国富の約半分であった。鉄道は、ヨーロッパからの借入資本で主に建設されたことは事実であるけれど、鉄道の価値は、それ以上になった。南北戦争によって老大な資本が破壊され、戦後、土地と鉄道の投資が急速に増加し始めた¹⁰⁾。1875年頃、合衆国は新しい時代に入った。1874年の信用・価格のインフレーションは、信用の崩壊によって阻止された。事業は精神的に回復され始めた。所得から支出を差し引いた超過部分は、急速に増大し始めた。新しい富の大部分は、土地 (real property) の、鉄道の株式あるいは債券の所有者に分配された。しかし、石油、銅そしてその他の鉱山物質の発展に関連した危険な事業における投資はほとんど損失を蒙った。にもかかわらず、危険な事業における投資は、大資本、すぐれた情報手段と組織能力をもった人々によって操作され、大きな利得を生みだした。富む者が一層富を増大させる現

象は、合衆国では他の国々よりもっとも強力に作用した。この理由の一つは、機械工業、穀物取引、製粉、家畜取引、製罐詰業そして小売業まで、如何なる他の国より事業の範囲が大きいことである。このような意志強固で不撓不屈の人々の手にビジネスの利潤が蓄積された。合衆国においては、普通のビジネスの利潤は非常に高かった。何故なら、資本の成長は急速であり、才能を持つ人々の前にまだ未開拓の分野が存在したからである。したがって、普通の率で利潤を獲得する人々は、何年間にわたって、巨大なビジネスで、大きな財産を蓄積するであろう。しかし、イングランドは、自余の世界に一世代先駆けて、石炭と鉄を各種のサービスに大きく利用した時、イングランドの鉄と石炭にはライバルがなかったように利益機会は変化する。「現在のアメリカ問題」(The American problem of the presentage) は、過去の「英国問題」より、スケール¹¹⁾は大きい。しかし、この問題を処理する手段も発展した。電信・電話そして快適で便利な交通手段は、すでに利用可能であった。強力な資本家は、生産的なビジネスや投機、そしてこの二つが結びついたものにおいて、生じるあれこれの問題の詳しい研究をさせるために高いサラリーで、鋭敏かつ熟達した助手のスタッフを雇用した。

「教育はアメリカにおいて常に深刻に考えられてきた」¹²⁾。しかし、教育は、ビジネスの目標を実現するための手段とは決してみなされなかった。教育は、新しい工夫を提案したり、あるいは、ビジネス組織を効率的にするための新組織の計画を提示したりする力を与えなかった。発明し、編成し、組織するアメリカ人の素質は、世界で最も素晴らしいという評価が生じた。このことを認めることは、アメリカ人の資質が、天賦の才能の公平な分配以上のものであるという¹³⁾ことではない。中世の有能なフロレンス人が芸術や政治において卓越性を求めたように、有能な若いアメリカ人は、発明者あるいは組織者あるいは両方であったことが確かであったことを注目するだけでよい。若い野心のあるアメリカ人は、職業が何であれ、克服すべき最も困難な仕事と困難を克服するための最も高度な卓越性を提供する仕事に自然に流れていった。自然淘汰の強力な過程は、このように、何百万の青年の中からアメリカの指導的産業戦士(the leaders

of American industry) を選び出した。これらの青年は、先代の多くの機敏な人種の両親からきており、金持になることにより仲間達よりより有能で偉大であることを証明しようとする決意でもって実業の世界に入った。¹⁴⁾ 富の蓄積による検証 (money test) は、全体として、普通の人々が自己の才能を適用できる他の如何なる検証よりより安全な検証である。

合衆国の大金持になった多くの人々は、人生の全盛期にあり、かつ企業心に満ち満ちていた。彼等のある人々は、社会的楽しみ (social amusements) あるいは文化に対してほとんど関心を持たない。彼等は、生活の「精神的な事柄」 (the lighter affairs of life) に第二流の才能しか持たないと自覚しており、組織的な才能の証明として主に評価される致富に従事する時が最も幸福であると自覚していた。致富で成功した人々が、同業者の評価を得るため、金目的でない仕事をする時、芸術や科学が最も活況を呈する。

合衆国の農業は、新世界に顕著であった粗放農法 (extensive methods) を離れて、旧世界の集約農法 (intensive methods) に移行しつつあった。しかし、合衆国の農法は、単に旧世界の方法ではない。それは、常に部分的に、典型的なアメリカの農業からきており、アメリカの農業においては、肉体的重労働は使用されなかった。

如何なる他の国も、「大企業への機会と誘因」 (opportunities and incitements to large enterprises) において、合衆国を追い越す見通しはまだない。それ故、合衆国の産業上の主導権の位置は、おそらく長い間、例外的な形態で維持されるであろう。¹⁵⁾ 実際、合衆国のような主導権をとれる国は、他の国から期待されない。何故なら、合衆国のように豊富な資源と機敏な広大な人口の両者を持つ国と競争できるような国は見当らないからである。世界は、合衆国の何倍もの未開発の資源を持っている。合衆国の成功は、その資源より合衆国に移住してきた人々の非常に力強い性格と刺激に負うている。¹⁶⁾ しかしながら、合衆国の人口の最良の気質 (the best strains) が数において速く成長していないことは注目すべきである。人間生活の改善のための社会科学の実際的な適用は、合衆国において、才能と熱情をもって展開された。アメリカ住民の新しい気質は、おそ

らくその氣質の最も強い側面をまだ示していないかもしれない。そして、それは、活動力は旺盛であるが、ややあまりにも個人主義的な北ヨーロッパからの移民によって、初期の合衆国にもたらされた国民性 (the wealth of character) を全体として弱めるよりむしろ強めるものとして重要な貢献をするかもしれない。¹⁷⁾ 北アメリカの生活は、この何世紀間、主に西ヨーロッパのいくつかの国の生活の継続であった。1760年から1850年頃まで、北アメリカの生活は英国式が支配的であった。その後、ドイツとスカンディナヴィア諸国からの移民が支配的になり、つづいて、イタリーそして東欧諸国であった。今日、ほとんど全ヨーロッパの生活が合衆国にある。この中で、英国のそれがリードしている。

- 1) A. Marshall, *Industry and Trade*, p. 141.
- 2) *Ibid.*, p. 142.
- 3) *Ibid.*, p. 143.
- 4) *Ibid.*, p. 144.
- 5) *Ibid.*, p. 145.
- 6) *Ibid.*, p. 146.
- 7) *Ibid.*, p. 149.
- 8) *Ibid.*, p. 149.
- 9) *Ibid.*, p. 153.
- 10) *Ibid.*, p. 153.
- 11) *Ibid.*, p. 155.
- 12) *Ibid.*, p. 155.
- 13) *Ibid.*, p. 155.
- 14) *Ibid.*, p. 156.
- 15) *Ibid.*, p. 158.
- 16) *Ibid.*, p. 158.
- 17) *Ibid.*, p. 158.

Ⅲ アンソロジー風結語——明治以来の日本の 経済発展の複合的諸要因の目録をも含めて——

日本が開国に踏み切った頃は、まだまだ世界は人種差別の甚しい時代であった。その実状は到底今日からは想像できない。その間に立って日本は我を忘れて欧化に専念した甲斐あって、何時の間にか準白人の第一号と認められたのである。この待遇を受けるまでに、どれだけ日本が大きな犠牲を払ったか……——宮崎市定『中国史』——

マルクス主義者を含めての近代主義者たちは……民族主義をよけて通った……近代主義とは、いいかえれば、民族を思考の通路に含まぬ、あるいは排除する、ということだ……民族は不当に卑められ、抑圧されてしまった。抑圧されたものが反撥の機会をねらうのは自然である——竹内好『近代の超克』——

以上、A・ガーシエンクロンとA・マーシャルの経済発展論を詳細に紹介してきた。詳細に過ぎたかもしれない。とくにA・マーシャル『産業と貿易』は informative で、この本のよりよい要約を与えることは困難であろう¹⁾、といわれるようにやむを得ないことであった。最後に、政府の産業に対するほとんど恒常的などいえる保護を不可避な特徴とする明治以来の日本の産業化過程にこれらの理論のどの部分が適用できあるいは参考になり、どの部分が適用できず参考に資することができないのかを示唆するためにいくつかアンソロジー風に整理して締め括りとしておこう。

1. 後発国の産業化の過程は、①「後発効果」②「借用された技術」③訓練された規律のある熟練労働者の形成 ④プラント自体の大きさを追求する、という基礎的諸要素が観察される。そして、後発国の産業発展を本質的に規定する特定の制度的装置である国家、銀行、イデオロギー・スピリットが、以上の基礎的諸要素を強める。ガーシエンクロンはそこでつぎのように分析している。英国の工業化は、貿易、農業、工業自体の収入の中から資本蓄積がおこなわれ、長期投資目的のバンキングの利用なしに進行したこと、しかしなが

ら、ドイツの資本蓄積は、銀行によって先導され、銀行は重工業部門に多角的な関心を示し、工業企業に対して圧倒的な支配権を獲得した。ロシアの経済発展の水準は、ドイツやオーストリアのような諸国より比較にならないほど遅れており、国内資本の稀少性は、如何なる金融組織も、大規模な工業化を金融するのに成功しなかったから、国家の産業部門への積極的介入（租税政策などを通じて）が不可避であった。なお、ロシアのビジネスにおける正直さの水準は低²⁾かった。

2. 遅れて出発した国は、工業化のために一定のイデオロギーが必要である。ロシアの「絶対的後進性」は、ドイツやフランスより力強いイデオロギーが必要であった。もし、日本がロシアよりも遅れた後発国であったとすれば、後発国日本の工業化は、ロシアよりもっと強力なイデオロギーが必要であったということになる。後発国が先進諸国にキャッチ・アップするためにはそれに駆り立てられる国民的動機と国民的凝集力が必要である。³⁾

3. 非西欧圏の後進国の工業化には、特殊な文化構造が工業化に及ぼす効果の問題がある。文化構造とは、民族の価値体系であると理解すれば、文化人類学のアプローチによる文化構造の研究は、非西欧諸国の後発国の経済発展に悲観的結論を導く傾向にある。民族学的なこのような結論は、経済発展のダイナミズムを適切にとりあつかわず、可変的諸要素が考察されていない、ロシアの経験を見よと、ガーシエンクロンはいう。しかしながら、ロシアは、思想・文化圏としては非西欧圏ではなくキリスト教という西欧と同一の文化構造に属していることは重視しておくべきである。非西欧圏の非キリスト教文化圏の儒教文化圏に属する日本の文化構造は、経済発展にとって促進的要因として作動した。

4. イングランドは、18世紀中に、道路網、水路網を完成させ、自転車、乗合・郵便馬車などの交通手段を発達させ、競争相手国（オランダとフランス）を十分追い越し、世界市場の中心地としての素地をつくった。良好な道路は良好な運河の出現より遅れた。イングランドは工業化開始以前に、インフラストラクチャーを整備していた。日本は、工業化と平行してインフラストラクチャー

の建設が進められた。⁵⁾

5. 国民的統一あるいは経済的統一・融合、経済ナショナリズムの意識を持つことが経済発展の必要条件である。イングランドが産業上の主導権を確立する以前の競争相手はオランダであったが、オランダでは、誇り高き中世諸都市の「経済ナショナリズム」(spirit of economic nationality)が発達していた。イングランドにおいては、17世紀にオランダやフランスと競合することによって、18世紀中頃には、イギリス人全体の風習も統一され、18世紀中頃から交通手段の発達によってさらに社会全体が統一融合していく。チューダー家の絶対王制期に、王国全体に適用される法律や行政秩序が定着するようになり、国内取引は自由になる。徳川幕藩体制は、中央集権的統一国家であり、日本の工業化は徳川時代に準備された。徳川日本はまた多様な「分権的」社会でもあった。

6. 中世においては、君主や支配階級は、経済上、軍事上の力はいうまでもなく、世界についての知識や視野の広さでは、大衆よりはるかにすぐれていた。18世紀の中頃までに、一般大衆は、中世の農奴の状態から脱して、精神的能力のみならず倫理的強さにおいても支配階級より急激な進歩を遂げ、賢さ、建設的能力においても、支配階級に決して劣らなかった。大衆の知識が進むにつれて、自分達の仕事に関する技術的問題についての詳細な知識量は、政府の官僚達のそれより大きくなった。それ故、大衆が各自の方向を自由に追求する方が、産業と貿易が有利であった。人民を支配する政府から、人民大衆が支配する政府に移行するにつれて、多くの仕事が政府に委譲される傾向がある。しかし、18世紀にそのようなことをやれば、政府は誤まって管理され、「汚職の温床」になったであろう。「小さな政府」は、一般大衆や民間が各自の仕事についての知識や情報が、政府の官僚達のそれよりすぐれていることを前提にしている。「大きな政府」は、人民大衆が政府を支配しているという前提に立脚している。しかし、一国の指導者や準指導者の知識の方が大衆のそれよりすぐれている場合にも「大きな政府」が発生する。このような状況では「小さな政府」は、一国を統合していくのに困難を伴うであろう。日本には、戦前・戦後を通じて後者のケースが適用されるであろう。

7. 土地所有者の集中（社会的権威と政治的権力を獲得するために大土地所有が必要になる）は農業を改善するために豊富な資本を供給した。土地の価値を高めたり建物をつくったりする農業改良は小作人のために地主によって完全におこなわれた。フランスでは、均分相続制が採用されていたため、大農経営と大規模な工場の形成のための資本蓄積が阻害されたのに対して、イングランドは、長子相続制の故に資本の集中が邪魔されず、次男三男等の非嫡子は実業の世界に入り、自己の運命を開拓せざるを得なかった。旧中国は、均分相続制であったのに対して、戦前・戦中の日本は長子相続制であった。

8. イングランドに勃興した産業は、① 技術的要因 ② その時代の特殊な環境 ③ イギリス人特有の性格 によって支配されている。これらの三要因が大量生産を生みだした。イングランドが産業上の主導権を確立した理由は、織物工業が家内工業を脱して、水力を利用して大量生産に移行したことである。大量生産は、何世紀も通じて西ヨーロッパ諸国において肉体労働の専門化が発展してきた結果である。イングランドの職人の原型は弓兵であった。大量生産は蒸気機関、鉄と石炭なしに発展することはできなかった。石炭と鉄がなければ、イギリスはオランダより広い支配圏を実現することはできなかった。イギリス人は、音楽のリズムのような規則的な動作を好む民族であった。イギリスに定着した民族は、北方ヨーロッパ最強の民族で、しかも、そのうちでも最強の人々であった。彼等は、勇敢で、自尊心に富み、生真面目で、誠実であった。「個性の肯定」であった宗教改革はこのような性格をもつイギリス人の生活態度に深刻な影響を与えた。そして、大陸からの亡命者や移民及び気象条件は、イギリス人の生真面目な性質を一層強めた。イギリスの中産階級や労働者階級の一部は、人生に対して厳しい態度で臨み、仕事を中断させるような娯楽を好まず、根気強く激しい仕事によってのみ達成できる物質的安楽を極めて高く評価した。このような性質がイギリスに19世紀の産業上の主導権を与えた身体的性格である。

9. イングランドは、1850年頃までに産業上の独自の主導権を確立後、確立するまでにおこなったような創造的仕事（creative work）にエネルギーを投入

せずとも、イングランドの実業家に利潤を獲得するのを容易にした。人は貧困や災厄から脱出しようとする時、勤儉節約し、克己努力し、将来のために現在の快楽を抑制し、資本を蓄積する。産業界の年寄の半分位の人々は、子供の頃、小屋に住み、母親から食事も満足に与えられず大きくなった。彼等は、時々、大遊蕩に耽ったけれど、後の世代のように、所得の大部分を消費する優雅な生活には関心を示さなかった。イングランドの資本蓄積の源泉は、職人の勤儉節約であった。高率の地租、インフレーション、逆進的な消費税そして徳川時代から継承された伝統的な消費パターンが日本の資本蓄積の源泉であった。⁶⁾戦後日本の高い個人貯蓄率は、社会保障の量的質的不足と戦前から低い水準の消費性向を示す伝統的な消費行動に支配されているからだと考えられる。

10. イングランドの発明の特色は、① 天才的なものではない ② 機械を単純化する ことであった。

11. 穀物法廃止（1846年）前の困難の時期に子供時代を過し、克己努力、企画力と機略に富んだ先代の実業家が敷いた路線は、人生は安楽であると考え、事業を有給の経営者にまかせるようになった、その息子達によって継承された。それでも、物価の一般的騰貴は、彼等に相当な利潤をもたらした。そして、彼等に強者の大敵である過度の自己満足を誘発させた。この過度の自信は、1873年と1875年の商業恐慌によって打破された。

12. 英国の製造技術は、1890年頃に、ドイツとアメリカのそれによって追い越された。最も重要な事柄は鋼産業の技術であった。英国は、鋼産業の技術の改善に熱心であったのかかわらず、ドイツの鋼産業に陵駕されてしまった。そして、また、英国は、高度な科学・技術・訓練を必要とする産業に遅れをとった。

13. 1904年頃、実業家達は産業上の効率を促進するために教育制度の改善について他国から学ぶ必要を認識し始めた。教育改革は「決定的に重要であった」。英国は産業技術の上でドイツやアメリカの後発国に追い付かれ追い越された段階で、教育改革を真剣に自覚するようになったが、日本の場合、工業技術上で先進国に追い付いた段階で、従来の追い付き型の画一的な教育制度の反

省から教育改革が必要になってきたといえよう。⁷⁾

14. イングランドが一つの運河も持っていない時に、フランスには素晴らしい土木工学を証明する運河網をすでに所有していた。フランスは、一時、道路と運河の面でイングランドに追い越されたが、再びそれらを修築してイングランドより前進した。イングランドやフランスなどの工業化の経験それに日本のその経験から、およそ工業化の道を踏み出す諸国はその前提としてあるいは平行的に交通手段システムを含む社会的間接資本を整備していかなければならないということである。

15. フランスに集中的な大量生産の成長を阻害した要因は、一つには、地理的、人種的要因の壁、二つには、強力な中産階級と裕福な労働者階級が存在しなかった。何故、戦後の日本で、大量生産経済が成立したのか。「富裕な」大衆が存在⁸⁾していて、国内市場が拡大・深化したからではないか。

16. ルイ14世のナントの勅令の廃止は、大量のすぐれた技術を持った職工を国外に追いやり、フランスの競争相手国イングランドに多くの才能ある職工を提供した。イングランドがユグノー教徒から受けた恩恵は計り知れないものがあった。

17. 富裕で審美的な購買者が、フランスの職人、小売商人、卸売商人の繊細な感覚と最良の個性的創造力を引き出した。供給が需要に影響を与えるだけでなく、供給が需要の支配を受ける側面を看過することはできない。戦後の日本の産業社会に大量生産方式が普及した一要因は、日本の消費者が非伝統的な財・サービスに対して画一的大衆的で審美的、個性的でなかったことに依存していたといえるであろう。

18. 「連帯」(solidarity) は、フランス人気質の特質であり、通時的感覚であった。「連帯」の精神が極端になると「独立」と「自律性」とに敵対するようになる。個人の自律性と中央集権的な政治機構（これは「連帯」精神の過度の論理的帰結であろう）の微妙なバランスの上にフランス社会が成り立っている。フランスと同様に中央集権化され、個人の自律性がフランスほど強くない日本の経済社会は、ある限定された意味でフランスと類似した社会組織故に類似した

経済計画を生みだした。フランスと日本の経済計画は、しばしば指示的計画(indicative plan)と呼ばれた。しかしながら両者には相違がある。前者は、各経済主体が公共の利益に注意を払うように、政府が将来の予測性を含めた可能なかぎりの情報を提供する「指示的計画」であるのに対して、日本の経済計画は、「指示的性格」以上のものである。日本のそれは、枝葉を取り払っていえば、実行計画であり、予測値を提供するだけでない計画内容を「周知徹底」させる誘導的性格を持ったものである、しかし、強制的性格を持ったものでないといわれている。しかしながら、伝統的に政府と民間企業とのインフォーマルな関係や日本の文化構造や社会構造を前提にすれば、是否の価値判断は別として、そのようにいえるのかどうか疑問である。¹⁰⁾

19. 18世紀後半から19世紀前半にかけて、フランスで大量生産方式が導入されても労働者階級の食事が貧弱であったため、彼等を引きつけることはできなかった。大量生産の重工業を操作するには体力が必要であって貧弱な食事からは頑強な体力は生じてこない、とマーシャルはみていた。彼は、重工業と労働者の肉体的な力能との関係に注目した最初の経済学者ではなからうか。

20. フランス人のエートスにほとんど適合しなかった造船業、鉄鋼業そして織物製造業は、政府の補助金や保護関税によって保護されてきたけれど、最も繁栄した産業ではなかった。政府は、フランス人の得意とするデリカジーと精巧さを必要とする国際競争力のある産業にはとくに援助を与えなかった。ヘクシャー・オリーンの定理に合致していた。これとは対照的に明治以来日本企業は国際競争力をつけるために政府の保護育成の下におかれてきた。戦前、諸財閥は自律性を保ちながら寡占的競争をおこなったが、政府と日本銀行の強い規制に服した。¹¹⁾戦後日本では、所謂産業政策の下に、自動車、造船・海運、鉄鋼、精密機械、工作機械、石油化学、電子計算機から雑貨までの産業は、政府による輸入規制や外国企業の対内直接投資の規制などによって長期間にわたって保護育成培養されてきた。このことは、経済発展論の視座からは、Gerschenkronの一命題が適用できるような興味ある事実を提供してくれている。¹²⁾

21. イギリスにキャッチ・アップし追い越したドイツの強さは、遠い過去か

らの根源的な資質の継承である。隔世遺伝的影響は、個人のみならず民族全体に適用されると、マーシャルはいう。このマーシャルの命題に従うなら、現在の日本経済の強さは、遠い過去の偉大な根源的資質に由来していることになる。われわれは、さしあたって、その遠い過去を封建時代の後期である江戸時代に求めておくのが妥当な見解であろう。封建主義徳川が非常に良く工業化された現代日本を生み出したのである。それ故、日本の近代的な経済発展史は、江戸時代の研究から出発しなければならない。

22. ドイツ人の思想が、哲学、文学そして音楽の「帝国」を創造した。この観念上の「帝国」が物質上の「帝国」の基礎になった。19世紀前半、学者と学生が各大学を移動することによって、哲学、科学、文学や音楽のドイツの統一運動を鼓吹した。この知的統一運動は、ドイツ関税同盟に結実した商業的統一運動に先行した。観念の力そして知的な力が物質的な力を生みだしていったのである。¹³⁾

23. ドイツは、各邦の長い間の分立のため、大量生産のための機会がほとんどなかったけれど、突然大量生産の利益を獲得した。この大量生産は、一方で、フレドリック二世などが展開した厳格な規律を表現するとともに、他方で、国民精神に関連した教育への熱望を示していた。このことが、ドイツを科学を大量生産に組織的に適用する指導的な国にした。大量生産に適した労働者は、規律ある学校生活において準備される。明治初期に後発国として驚くほど完備した義務教制度や戦後日本における「平等主義」の名の下に進められた画一教育は、大量生産体制に適合した教育システムであったことは上記にあげたドイツの例にもあるように真理である。もし、日本において今後思想に画期をもたらすような創造的仕事を多く出そうと計画するなら、創造性や独創性を窒息させるような過度の受験教育による画一教育制度を是非廃絶する必要がある。

24. マーシャルは、60年前、多分40年前も、平均的なドイツ人は、イギリス人より¹/₂しか仕事をしなかった、といている。40～60年前とは、1850～70年頃のことである。しかしながら、イギリス人が繁栄により甘やかされている間に、ドイツ人の産業労働者は以前より働くようになり、労働生産性はほぼ変ら

なくなり、しかも、ドイツの労働者の労働時間がイギリスより長くなった。後発国が急速に先発国に追い付く過程で、労働者が生産性を向上させ、長時間労働をおこなうことは避けられない傾向であることは経済法則の一つである。

25. 先進国イギリスを凌駕しようとしたが、実際的能力や組織的能力の弱さと自己認識していたドイツ人は、まず、イギリスの製造技術を直接模倣することによって始めた。つぎに、イギリスの企業に雇用されて、低賃金で勤勉な用役を提供し、ビジネス内部の知識を習得した。このようにして得られた実際の知識と才能が、大規模な工業化の基礎に役立られたのである。後発国日本は、ドイツとは異なった形態で、先進国の生産技術、ビジネスの方法など多くの事柄の模倣から出発したことは、日本工業史の教えるところである。

26. 経済進歩が、彫琢された精神的訓練より、当意即妙な機知と健全な判断により一層依存しているとすれば、ドイツの工業上の指導権への希望はもっと小さかったであろうとマーシャルは述べている。ドイツは、大学や技術研究所の組織的訓練を如何なる他の国より速やかに商業や工業に利用した。自然科学上でいまだに開拓されていない広範囲な領域は、十分な訓練と高度な研究室で装備された条件に依存している。「天賦の機智」は、これらの条件の上に発揮される。ドイツの大学や研究所のすぐれた組織的訓練が、ドイツに工業上での指導権を駆り立てた一要因なのである。

27. ドイツは、英仏のすでに確立している市場圏に進出する場合、まず、利益が小さくてもどんな小さな注文にも応じたこと、つぎに、その地方のニーズに綿密に適応したこと、それから、気候、趣味、習慣そして迷信における差異をすばやく注意した、第四に、相対的に小さなリスクで長期的な掛売りをおこなうビジネス事情をよく知っていたこと、第五に、東欧、アジアそして南米の言語をマスターすることに努力したことである。

28. ドイツの鉄工業と建設業は、スラブ民族とラテン民族からほとんど強健な肉体労働者の供給を受けた。彼等は、低賃金で勤勉に働き、半自動的機械の操作に役立った。このことは、日本の工業化にあたっては、未熟練・半熟練にしる熟練であろうと労働力の供給は、日本国内で自前で調達されたことと比較

すると興味ある事柄である。

29. 保護関税は、ある産業に外国に対する大量販売の機会を開きながら、同時にその産業に国内市場が攪乱されないように保障することであるとすれば、大量生産を採用しているこの産業は保護関税により多くの利益を得ることができるのは当然であり、このことが一層大量生産経済を強化する。それ故、アメリカとドイツでは、大量生産が確立した時と以前では政府の政策が異なるという経済理論を定立した。日本は、明治44年の関税自主権完全回復まで保護関税によって幼稚産業を保護する余地はなかった。それ故、明治の日本の工業化は、保護関税以外の方法で産業の保護をおこなわざるを得なかったのである。

30. アメリカに産業上における主導権をもたらした原因は、第一に、最強国中の強国になっているのに青年の精神を維持していたこと、第二に、老大人人口の生活様式の画一性、第三に、半自動機械を運転できる移民労働の大量供給、第四に、アメリカ人の計画と管理における機敏な決断力、第五に、長距離輸送の鉄道運賃の低廉化、第六に、少数の人々に大量の資本が蓄積されていたこと、である。

31. ヨーロッパからのアメリカ合衆国への移民が母国からもたらしたものは、農業技術の知識、遠大な利益を期待して現在の苦しい仕事を耐える喜びと服従の習慣そして正規の政府についての若干の観念であった。このような諸要因がアメリカ合衆国にもちこまれる前にすでに合衆国には豊富な天然資源が存在していた。移民はアメリカ合衆国の富を発展させた。人々は、異なった習慣をもった人々との交流により、あたかも従来自然法則のように思ってきた思想や行動について多くの習慣を吟味しはじめる。移民は、母国に残った大多数の人々より、機敏でより弾力的な考え方を持っている。

32. 合衆国の人民の精神的エネルギーは、大西洋を渡る偉大な移民行為によって刺激されたばかりでなく、合衆国の広大な内部における「異常な」移住の継続によって刺激された。この内部移住の原因は、最も豊富な地域に初期の移民が接近することができなかつたからである。最も活動的で、冒険心に富む初期の移民の子孫は、大陸の中心地にある経済的に魅力のある土地へ移動した。

33. イタリアやヨーロッパの中東地域の貧しい人々が、アメリカ合衆国に避難場所を求めて移住したが、これらの人々の中には非常に優秀な人々が含まれていた。これらの多くの移住民が、アメリカ合衆国に、相対的に低賃金で、大工場におけるルーティンな仕事をし、相互に補充しあう才能を持った大量の労働者を供給することを可能にしたのである。

34. ドイツ以外の国で、より次元の高い機敏な労働者を無限に供給できる国はアメリカ合衆国以外にはなかった。すべての移民は、孤立した行動と個人主義的ねらいをいづく傾向がある。この傾向は、物質的成功の熱心な追求者を育て、また、機敏さ、飽くことなき努力、賃金の高低によって職業を変えることを促進した。

35. 教育はアメリカにおいては常に深刻に考えられてきたが、ビジネスの目標を実現するための手段とは決してみなされなかった。

36. 全体として、普通の人々が自己の才能を検証する方法として富の蓄積による検証は如何なる他の手段よりより安全な検証手段である。合衆国で大金持になった人々は、「精神的事柄」に第二流の才能しか持っていないと自覚しており、組織的才能の証明として主に評価される致富に従事する時最も幸福である¹⁴⁾と自覚していた。

37. 合衆国の成功は、その物質的資源より合衆国に移住してきた人々の非常に力強い性格と刺激に負うている。

38. われわれは、いままで、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカそしてロシアの経済発展の諸要因に関する A. Gerschenkron と A. Marshall の分析を詳細にみてきた。ここで、最後に、明治以来の日本の経済発展の複合的諸要因のリストをあげて本稿を締め括っておこう。

その前に何故日本の経済発展を問題にするのかという問題の所在を明示しておこう。第一の問題は、後発国日本が欧米の先進諸国にキャッチ・アップすることに駆り立てられた国民的動機は何か、明治以来の日本の経済発展史は技術導入の歴史であったということが出来る。それは何故か。現代経済成長理論の理論的帰結は、経済成長の推進力は労働や天然資源よりも資本蓄積と有効需要

であることを教えている。問題は、後発国の日本の経済が戦前戦後を通じて、如何なる条件と要因が、経済成長の動力である高い設備投資率と大きい有効需要を発生させることを可能にしたのかということである。これが第二の問題である。第三の問題は、圧倒的多数の低開発諸国が、現代の経済成長理論の教え通りに、何故高い資本蓄積率と大きい有効需要を喚起できないのか、ということである。これらの問題に対する理論上の解答が与えられるならば、経済発展論や理論経済学に非常に大きな貢献を果すであろう。以上のことを念頭に置きながら、戦前を含めた日本の経済発展の複合的諸要因の目録（順序不同）を個条書きで提示しておこう。¹⁵⁾

① プラスの後発効果 (A. Gerschenkron)——後発国は先進諸国からくる有形無形の各種の圧力により産業諸部門間などの度の過ぎた不均衡からくるマイナスの後発国効果が発生する (Gerschenkron はこの側面については言及していない)。

② 日本儒教¹⁶⁾ (中国儒教や朝鮮儒教¹⁶⁾とはかなり異なった解釈がなされた) の役割。

③ 日本独自の社会経済体制——新古典派経済学¹⁷⁾という資源が市場における価格形成を通じて最適に配分される (効率的経済が実現されている) という欧米型の市場経済でない、X効率 (H. Leibenstein) を含む別の種類の効率を意味する大量生産経済システム——私はこのシステムを準市場経済体制 (Quasi-market economy) というコンセプトで把握しておきたい。

④ 農民と職人は、プロテスタントの禁欲の倫理に類似した儒教 (Confucianism) の倫理を持っており、勤勉に働き、辛い仕事を組織的にやりとげる能力を持っている。日本の労働者は、労働の分配率が減少しても不満をあまり公然と表明せず、遠い将来の目標のために消費を差し控える強い意志を持ち、豊富で良質な労働力を低賃金で供給した。労働者も経営者にも国家の経済目標に対して強い一体感を持つことに抵抗を感じない。

⑤ 恵まれた地理的自然的条件——温暖、太平洋における要衝の位置、豊富な水資源、優良な港湾など——。

⑥ 義務教育制度の完備。高い教育水準による新技術に対する適応能力の高い労働者の存在。

⑦ 日本的経営，良好な労資関係——労資紛争コストの相対的逡減，労働組合は技術革新の導入に強力に反対しない等々——。

⑧ 都市環境，住宅，道路，下水道，地域社会の成長などの生活関連部門への支出の低さ，社会保障の量的質的不備，画一教育による個性と独創性涵養の失敗。

⑨ 戦前の日本は，巨額の軍事費の負担と二カ年間の徴兵制による圧迫が大きかったが，戦後の国防・軍事費の支出は少なかった。戦前の外地防衛費や多額の外地投資は，日本の植民地・半植民地から得られた経済的利益より大きかった。¹⁸⁾もしそうだとすれば，領土の喪失は日本の経済発展にむしろプラスになったことになる（外地の純経済投資は懐妊期間中に喪失し，日本国民は台湾から高い砂糖・米を輸入していた）。¹⁹⁾

⑩ 戦前の日本経済の欠陥の一つであった重化学工業の原料問題が，戦後には基本的に解決した。

⑪ 戦後日本は，戦中戦後，欧米で開花した技術革新を容易に利用・摂取することができた。何故なら，戦争で既存設備が大部分破壊されたことと賠償引当による旧設備の撤去により，戦後日本の工業はほとんど技術上空白の状態だったから。²⁰⁾

⑫ 戦前の中進国水準は，欧米先進諸国に対しては労働集約産業によって著しく有利となり，アジアの後進諸国に対しては資本集約産業によって有利になるという両刀使が出来た。

⑬ 戦後の占領政策の結果の一つである一連の経済民主化政策は，若い新実業家に活躍の途を開いた。

⑭ 戦後日本における社会階層関係と社会移動のより大きな変貌——「平等主義」の進展，その帰結として高度大衆社会の出現——。²¹⁾

⑮ 国際競争力育成のために長期間にわたって諸産業を保護培養した日本の産業政策，東アジアの後進国から出発した後発国日本の特殊性故に官僚は産業に関する情報を豊富に持ち欧米諸国の政府よりより産業に対する支配力が強い，また，強力な産業団体と政府との関係。²²⁾²³⁾

⑯ 戦後日本の輸出は、世界の平均輸出増加より3倍近い比率で伸びた、円安の為替レート。欧米先進諸国ではケインズ政策が功を奏して完全雇用が実現し、輸出市場が拡大した。

⑰ 高い水準の海外直接投資——1960年代初期、日本の海外直接投資（直接投資の収益率は7～9%で外国の対日直接投資のそれより小さかったと考えられる）は、外国の対日直接投資より大きく、1967年には純債権国となる。1972年までに、日本は世界中で主要な直接投資国となる。

⑱ 高い個人貯蓄率。

⑲ 高水準の民間設備とそれを保障する資金調達メカニズム、企業に対する株主の支配力は弱い。

⑳ 規模の経済——激烈な企業間競争——活発な技術革新。

㉑ 間接金融体制——人為的低金利政策——。

㉒ 二重経済構造。

㉓ 昭和11年頃（それ以前の大正時代からといってもよいが）から今日にいたるまで、大都市市街地の地価は、一時的に低下したことがあっても、傾向として上昇しつづけ、昭和30年頃からとくに都市の地価は異常に高騰する。この異常な地価の騰貴は、企業にとって資金調達の有利な担保物件となる——土地所有観における日本と欧米諸国の相違——。

—完—

- 1) Firms and Markets, Essays in Honour of Bail Yamey, Edited by K. TUCKER and C. BADENFULLER, ST. MARTIN'S PRESS, 1986, p.228.
- 2) ビジネスにおける不正直 (dishonesty in business) は、発展途上国にとって深刻な問題 (a serious problem) である。不正直な取引は正直な取引を市場から駆逐するからである [G. A. Akerlof, The Market for "Lemons": Quality Uncertainty and the Market Mechanism, Quarterly Journal of Economics (August 1970), p. 495 を見よ]。
- 3) 現代経済成長理論の理論的帰結は、経済成長の駆動力は労働や天然資源でなく資本蓄積と有効需要であると教えている。圧倒的多数の低開発諸国は、現代経済成長理論通りに、何故高い資本蓄積率と大きい有効需要を喚起できないのか、日

本経済の場合、先進国にキャッチ・アップすることに駆り立てられた国民的動機と国民的凝集力が高率の資本蓄積を促進した有力な要因の一つであることは疑いを入れない。

- 4) 文化人類学は、文化を固定的なものと考えずに非常に流動的であり、各文化の相互接触によって短期でさえ変化するけれど、どちらの方向に固まるかは簡単にきめられないということである〔梅棹忠夫、篠原三代平、宮崎勇三氏の座談会「経済学と文化人類学の接点を求めて」『E S P』昭和51年第56号所収〕を参照。
- 5) 沢本守幸『公共投資100年の歩み——日本の経済発展とともに——』（大成出版社1981年）を参照のこと。
- 6) Seymour Broadbridge, *Industrial Dualism in Japan, A Problem of Economic Growth and Structural Change*, FRANK CASS, 1966, Chapter 1, *The Origins of Industrial Dualism* を見よ。
- 7) もし、日本の高等教育制度が自然科学において西欧諸国のニュートンやアインシュタインのような自然科学者達がかつて為し遂げた偉大な基礎研究上の独創的な発明・発見の業績を出すのに適さないのであるなら、そして、もし、社会科学の上で欧米諸国に衝撃を与えるような「知のパラダイム」や「科学的研究プログラム」（ラコトシュ）を輩出し、西欧諸国の「知の体系」における完全独占に日本の社会科学が参入することができるような業績を出すのに不適であるならば、当時の英国とは異なる環境で、教育改革が不可避になってきたといえる。
- 8) 戦後の日本社会は、欧米諸国や社会主義諸国の階層社会と比較すればおそろしく非階層社会であることは疑うことのできない事実であろう。階層構造には多様な形態が存在するが、代表的なものは a) カースト, b) 身分制（世襲制を通常とする階層）, c) 階級（社会階級という意味である。社会階級とは、(i)所得・富・経済的位置の同質性, (ii)生活様式や教育的・文化的な同質性などによって他の成員との相違がきわだつようにグループ分けされた人々の集合のことである）〔『経済学大辞典』東洋経済新報社の「社会階層」（social stratification）の項目の社会階層の定義にしたがった〕。
- 9) 馬場正雄「日本の経済計画の性格と政府の役割」（『E S P』昭和51年第56号所収）を参照のこと。
- 10) 一般的にいつて欧米社会に生起する経済現象は、その地域の文化の中で発展してきた。この意味で欧米の先進国を対象とした欧米の経済学は相対的なのである。ある経済学上のテーゼが、欧米社会で貫徹したとしても、欧米と異なる文化構造や社会構造を持った、たとえば、東アジアの諸国の文脈ではいいにつけよきにつけ異なった機能を果すのである。アダムスミスの個人の自己愛にもとづく私的利益の追求が公共善や社会的調和をもたらすというテーゼは、スコットランドやイングランドなどの欧米の社会構造的な文脈の中では正当な命題であったとして

も、異なった文化圏ではそれは妥当性を持つであろうか。たとえば、旧中国では、人々は西欧の人々に勝るとも劣らないほど私利私欲を追求した結果、旧中国社会は砂のようにバラバラになってしまったのではないか。したがってスミスのテーゼは、文化や社会の諸構造が異なれば異なった結果に帰結する可能性のあることを知って適用しなければならぬのではなからうか。

- 11) 斎藤謹造『比較経済発展論——歴史的動学理論の形成——』（東洋経済新報社、昭和58年、274ページ）。
- 12) 明治以来の日本の経済発展史は、Gerschenkronの国家とイデオロギーの果す役割の命題だけでは説明できない部分があることも事実である。
- 13) 唯物史観あるいは史的唯物論の短所は、究極的、長期的そして理論的には経済一元史観あるいは経済決定論であって、観念の力が果す役割を論理的に否定している点にある。唯物史観は上部構造の相対的独自性と上部構造の経済的土台・下部構造への反作用のテーゼを100年1日の如く唱えているだけで説得力がない。観念やエートスそして文化が下部構造にどのような積極的作用を与えているのか具体的に分析してみせることであろう。日本の経済発展史はそのために格好の素材を提供しているのではないか。
- 14) 致富で成功に導いたにすぎない日本の大企業の経営者達は、すべてではないが、実業の世界以外の教育、国防、科学・技術などあらゆる事柄に発言しているのは勝てば官軍で惚れて自己の才能を自覚していないからだろうか。
- 15) このリストは、高橋亀吉『戦後日本経済躍進の根本要因』日本経済新聞社、昭和51年、江見康一・塩野谷祐一編『日本経済論』有斐閣、昭和57年、H.パトリック/H.ロゾフスキー編、金森久雄監訳『日本経済の発展』日本経済新聞社、昭和53年、南亮進『日本の経済発展』東洋経済新報社、昭和56年、R. P. ドーア、田丸延男訳『貿易摩擦の社会学』岩波書店1986年などを参考にしながら、私見を加えながら整理したものである。
- 16) 日本儒教・中国儒教・朝鮮儒教を考察するのに役立つ文献として、宮嶋博史「朝鮮社会と儒教」（『思想』1986年12月号所収）、載国輝「儒教文化圏」論の一考察（『世界』1986年12月号）が出た。このような論文が一層書かれることを期待したい。
- 17) 日本経済の体質をどのように考えるのか、三種類の所説が考えられよう。1) 戦前戦後を通じて日本の経済発展は、ワルラス経済学のような自由な価格メカニズムを媒介して実現されたものでないという見解、2) 戦前の日本経済はたしかに財閥などの存在のために、市場メカニズムは十分に作動していなかったけれど、戦後はプライスマカニズムが作動して、資源が満足のいくように効率的に配分されたという見解、3) 戦前も戦後も日本経済の体質は均衡体質を持っており、伸縮価格の市場メカニズムが working として資源が最適に配分されたので、

日本経済は新古典派型経済であるという見解。1) については、Ronald Dore, *Goodwill and the spirit of market capitalism*, *The British Journal of Sociology* (Volume XXXIV, Number 4, 1983) が参考になる。3) については、最近では、香西泰・原田泰「日本の経済発展・再考」(『東洋経済』臨時増刊, 近代経済学シリーズNo. 68-73. 所収) がこの立場の一例である。テクノクラートの両氏は日本の良好な経済発展は、中央集権的経済政策の成功によっているという従来の「通説」=米國商務省の「日本株式会社」論（これが通説であるといえるのかどうか疑問が残るが）は誤りであって、日本の顕著な経済発展の「最重要要因」は profit-seeking の活動にあったとする。これは、ありふれた新古典派の理論的枠組に回帰したもので、丁度、一部のマルクス経済学者が日本の経済的成功は単純に搾取率が高かったからだというのと同じように陳腐な結論である。非マルクス経済史家は数量経済史などに逃避しないで、日本の経済体質についてもっと真正面からの議論が望まれる。

- 18) 小野進「日本の経済発展過程の理論化をめぐる方法的諸問題」(『立命館経済学』1985年12月号) 参照のこと。
- 19), 20) 高橋亀吉, 前掲書, 9ページと6ページ。
- 21) 戦後経済の初期条件については、香西泰『高度成長の時代』日本評論社, 1981年, 40~44ページを見よ。
- 22) 高度大衆社会の負の側面を剔抉した西部邁『大衆の病理』(日本放送出版会, 昭和62年。この本は原稿を印刷に付した後知った)は大衆批判として一読に値する。
- 23) 小野進, 前掲論文を見よ。